



N HKに『いい移住』という三十分弱の番組がある。昼ご飯を食べながら時々見る。都会から地方に移住した若者や家族の奮闘を描いたものだ。必死さが伝わってくるものや、どこか能天気なものや、まさに十人十色で、選んだ職業もみんな違っており凶鑑を眺めているようなおもしろさがある。

見るようになってからずいぶん経つのにこの間見ていて突然、ぼくも移住をしたんじゃないかと思った。今さかんに言挙げされている移住は、都会から地方という方向性があること、起業なり企画なり人を呼び込む活動をしていること、家族で移ったり出産したりして人口を増やしていること、公務員になって（民間の場合もあるが）地域の課題に取り組むこと、いずれかあるいはいくつかが当てはまる。今は、単に移り住むだけでは移住の意味を満たさないようなので、ぼくもこれまで自分を移住者と思ったことがなかった。でも、転職こそしなかったが地域に移り住み、仕事とは別のことに熱を上げ、人口もわずかながら増やし、ともに地域の課題にじたばたしたことを思えば、移住者の端くれと自認してもいいような気がしてきた。県内移動ばかりでスケールは小さいが、ぼくを移住者とするならば、移住仲間になるSさんと久しぶりに電話で話した。

「おお、声が変わらんね。」
「ああ、元気だ元気だ。ん？今か。今は百姓だ。三反六畝の田んぼ作っちゃうぞ。去年は七十俵出した。バリバリだろ。」

Sさんはそう言って昔と変わらぬ豪快な笑い声を響かせた。電話の向こうから土の香りがしてくる。

Sさんは同職であり、学校と役場で同じ時期に何年かずつ勤めた。年も一つしか違わず、境遇が似ているのをネタにふざけた話も真面目な話もよくした。ぼくが松江に移った後しばらくして、Sさんが退職したと聞いた。介護離職だった。思っていることがいつだって顔に出ていて、口にする言葉もその顔と寸分違わないので、ぼくはSさんのことを「日本一の正直者」と呼んだ。時には敬意を込めて、時にはからかって。いつもの人懐っこい笑顔で退職していることを願った。「この間は、小学校でこんにやく作りを教えたぞ。」
「へえ、もうすっかり地域のおつつあんだなあ。」
「ああ、そいだそいだ。もう先生なんて呼ばせせんけん。農家のおつつあんだけん。」
相変わらず日本一の正直者のままで、今の気持ちの張りを隠そうともしない。移住の苦しさも教員の苦しさもともにくぐってきた仲間の元気な笑い声を聞くのは実にいい気分だった。

専門ババ奮闘記 (その2)135

木幡智恵美

コロナ感染 (3)

抗体検査を受ける朝が来た。大方は覚悟しているのに妙に落ち着かず、夜中に何度も目が覚めた。娘の部屋のベッドから起き上がり、まずは洗面所に降りて洗濯機をかけ、台所に行つて朝食を作る。夫の部屋に持つて上がり、「ご飯だよ」と襖の前に置いて降りた。息子は、私の調理したものをさえ触れない徹底ぶりだ、私たちが終わった後、自分のを作つて部屋で食べる。もちろん、家の中でも全員マスクをし、触れた所には消毒液を噴霧する。

午前中、息子と一緒に抗体検査に行き、午後には夫の入院が決まった。高脂血症、狭心症の持病があるためだ。そして、息子と私の結果も夕方には出た。息子は陰性、私は予想通り陽性だった。これまで感染が怖くて仕方がなかった。しかし、いざ感染したとなると、これで怖がることはないのだと、妙な安心感に覆われた。が、そう思った次の瞬間から、息子に感染させたらどうしようという一層強い不安が襲ってきた。とにかく、近づかない。これまで居た娘の部屋を引き払い、私は一階で、息子は二階で過ごすことにする。布団を居間に運び、トイレも私は一階のみ、息子は二階を使う。どうしても共用となる洗面所は、私が使ったあとは消毒液を撒く。もちろん使う道具、材料はすべて別。台所も同様で、私が使った後は窓を開けて空気の入替えをし、使ったものには消毒液を散布する。息子とはそういう取り決めをして、その夜は久々によく眠れた。

翌日、夫を病院に送る。指定されていた駐車場に車を止め、夫がメモしていた番号に電話をすると、ビニールで覆われた車椅子を押した看護師が迎えに出て来た。ビニールで周りの空気と遮断された夫は、病院の中へ消えて行った。

帰って、一階の掃除にかかる。すると、二階からも掃除機の音が聞こえて来た。暇つぶしなのか、気分転換なのか、結構長い時間ごとごとと音がしていた。

夕方保健所から電話があり、私は自宅療養になり、明日、新型コロナ対応の医師や看護師、薬剤師から連絡が入ること。息子は濃厚接触者ということで一週間自宅待機するよう言われる。これから一週間、息子にうつさないことが私の目の下の課題だ。

30代フリーター 全国の地方議会のうち、女性議員がゼロか1人だけの議会が4割を占めていることが朝日新聞のアンケート調査でわかった、と報じられている(2月18日朝刊)。列国議会同盟が去年の「国際女性デー」を前にまとめた世界の議会下院や一院制の議会の女性議員の割合は全体では26・1%だったのに対し、日本の衆議院は9・7%で、188カ国中165位と、G7では唯一の100位台だった。政治制度も経済水準も先進諸国と基本的な違いがないのに、なぜ日本だけ極端に女性議員が少ないのか。

年金生活者 安倍晋三らが強調した西側諸国との「普遍的価値」の共有は、この大きな落差を埋めることができないことを示している。その「価値」を構成する自由とか法の支配といった制度、すなわち空間的な要因でこの落差を説明できないなら、時間的な要因を考えるほかない。つまり歴史をさかのぼる必要がある。

その過程で行き当たるのが縄文時代識の過程を指す。そこで想定される父は必ずしも実在する父ではない。男児と母との間を裂く存在なら、父に代わる人物はもちろん、人間以外のものも含む。息子のそばから一時的に離れることを強いる母の仕事は典型例と言える。

男性にとって、職場で仕事に打ち込む女性は父のばかりを向いている母のように無意識のうちに感じられる。幼児なら「ママ(仕事に)行かないで」というところだが、それを言えない成人男性は差別という迂回路を通じて女性の仕事を抑えようとする。

30代 それだと男性は女性を差別するように出来ているように聞こえる。

年金 資本主義のもとで商品化され労働力は原理上、性の差がない。ただし、製造業など第2次産業を牽引車とした産業資本主義の時代は筋力があるという労働が多かったため、職場での女性差別は公然と残っていた。それがサービスや情報など第3次産業を牽引車とするポスト産業資本主義にかわつ

にあつたとされる母系制だ。吉本隆明は『共同幻想論』の「母制論」で母系の社会を「未開の段階のある時期に、女性が種族の宗教的な規範をつかさどり、その兄弟が現実的な規範によつて種族を支配した」社会として描いている。つまり宗教的な権威を女性が持ち、政治的な権力をその兄弟が担ったということの意味する。

縄文時代は1万年ものあいだ続いたことを考えれば、こうした母系的なメンタリティーが今の日本人にも受け継がれていることが想定される。だとしたら、現在でも政治的な権力は兄弟が、つまり議会は男性が担うものだという心性が温存されていると推定することができる。

30代 だとすれば、そういう心性が残っている限り、女性差別はなくなりというということになる。

年金 現在の社会が母系社会と異なるのは、女性が宗教的な権威を独占していないところにある。これは政治的な権力を兄弟に独占させる根拠がなく

て、筋力の差に意味がなくなった。その結果、女性への差別は労働過程、より広くは市場の機能を妨げる障害とみなされるようになった。

それは人類がようやく性別役割分業やそれにもなう性差別を脱する現実的な基盤を手にしたことを意味する。現在はその転換の途上であり、それが差別を排除するポリティカルコレクト

なつたことを意味する。女性が議員になることを制約するものはなくなつたということだ。

朝日新聞の記事は、女性議員の比率が5割の議会が東京都清瀬市、大阪府島本町など4市町あるとことを伝えている。これは古いメンタリティーを、議会という限定された場であるにせよ、乗り越えることが可能だということを示している。

30代 女性の少なさは議会だけでなく、企業や役所の管理職の数についても言われ続けてきた。

年金 職場での男性による女性差別は、エディプスコンプレックスという性の次元にある心的な過程が、性とは次元の異なる労働の過程で反復される結果だ。そうした次元の混同は資本主義の発展を妨げるので、ジェンダー平等が世界の潮流になつた。

フロイトのいうエディプスコンプレックスは、3〜6歳くらいの男児が母と性的に交わりたいという願望を持ち、それを禁じる父に殺意を抱く無意

ネスの広がり、それに対する反発とがせめぎ合う光景を現出させている。

30代 女性差別の背後にエディプスコンプレックスを想定すると、差別はなくならないという結論に導かれないか。

年金 差別は性そのものとは異なる次元で起きる現象だ。だから、そうはならない。ただし、性そのものは「女性的なもの」と「男性的なもの」との差異によつて成り立っている。異性どうしでも、同性どうしでも、それは変わらない。

たとえばその差異は男女が争うときにあらわになる。そのときの男性の最大の武器は怒りであり、女性のそれは相手の遺棄だ。男性の怒りは母胎の菜園からおのれを追放した母への怒りの反復であり、女性による遺棄はその追放行為の反復にほかならない。どちらの武器が強力かは歴然としていない。怒りが瞬時の爆発に過ぎないのに対し、遺棄は持続可能だ。この非対称性は差別とは別次元にある。

ニュース日記 867
中村 礼治

女性差別をめぐって